第４章　印旛沼とその流域の生き物たち

～水草の復元を試みる植生再生の実験池（成田市北須賀）～

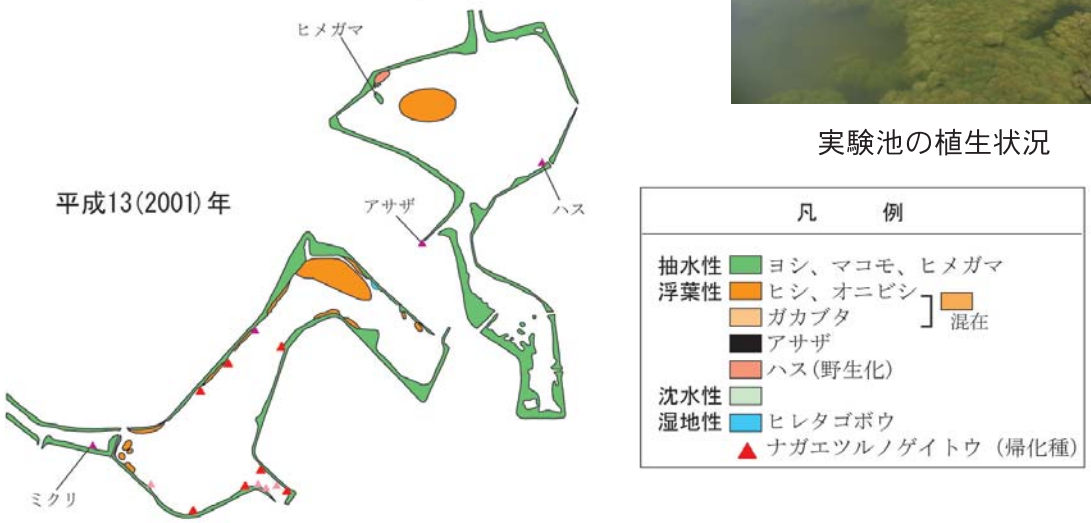
（祖母）
ここが，私が友達とよく見学に来る水草の実験池だよ。

沼の水がきれいだったころは，どんな種類の水草があったのですか？

（祖母）
昭和３８年（１９６３年）に印旛沼開発工事が行われる前の印旛沼は，透明度もよく沼の底まで見えたものです。水草は現在では昔にくらべてずいぶん数や種類が減ってしまったのよ。

そこで，昔から沼に生育していた水草を再び沼に再生しようと努力しているんだよ。

実験池の植生状況



（出典：笠井貞夫氏による調査結果に基づき作成）

沼や水辺の植物たち

〈抽水性植物〉

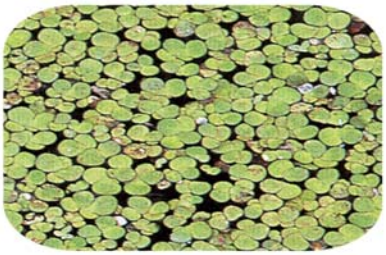
ヨシ

マコモ

ヒメガマ

フトイ

〈浮葉性植物〉


ウキクサ

サンショウモ

ガガブタ

アサザ

ヒシ

ヒメビシ

トチカガミ

ヒシモドキ

ヒルムシロ

〈沈水性植物〉

タヌキモ

ヤナギモ

ササバモ

（出典：日本水草図鑑，角野康郎著）

注　抽水性植物：根が水底にあり茎や葉を伸ばして水面上に出る植物をいいます。
注　浮葉性植物：根は水底にあるが水面に茎や葉が浮かんでいる植物です。根が水底についていない植物もあります。
注　沈水性植物：根や茎・葉が完全に水中にある植物をいいます。

（父）
良子，今日の夕刊に「外国から来て日本にすみついた生きもの」の記事が出ていたよ。印旛沼でも問題になっているようだ。

沼にいつ，どうして外国から来た生きものたちが，すむようになったのですか？

（父）
オオクチバス（ブラックバス）は大正１４年（１９２５年）ブルーギルは昭和３５年（１９６０年）にアメリカ合衆国から日本に移入され，印旛沼ではオオクチバスが昭和５８年（１９８３年）に，ブルーギルが昭和５９年（１９８４年）に初めて，すんでいることが確認された。

オオクチバス

ブルーギル

（写真提供：千葉県内水面水産研究センター）

（父）
オオクチバスとブルーギルは肉食性で，沼に前からすみついている生きものたちを捕えて食べてしまうため，沼の生態系を壊してしまった。この魚（外来生物）が増えた原因は，沼の生態系を考えない放流と，この魚を食べる生きものがいないことなどが，増え続ける原因となっている。

沼とその流域には，動物ではカミツキガメ，ミシシッピーアカミミガメ（幼体名：ミドリガメ），カダヤシ（淡水魚），オオマリコケムシ，などの外来生物たちがすみついている。

カミツキガメ
（写真提供：小林頼太氏）

ミシシッピーアカミミガメ
（写真提供：小林頼太氏）

ナガエツルノゲイトウ

ナガエツルノゲイトウの花

（写真提供：財団法人印旛沼環境基金）

（父）
植物ではナガエツルノゲイトウが平成２年（１９９０年）に鹿島川下流で発見されたが，それ以来，どんどん勢力を伸ばしている。もともと沼に生えていたマコモなどに害があるのではと，みんなが心配している。

～クラブ活動（里山や谷津田の生き物と触れあう）～

先生，昔すんでいた生き物たちが，また，沼にかえってくるには，私たちは，どうしたらいいのですか？

（先生）

まず，印旛沼の流域に住んでいる私たち一人ひとりが，自分たちの生活と印旛沼が深い関わりを持っているということ。都市や工業団地を造ったり，生活排水を流したりするという人間の行動が，印旛沼とそのまわりの自然環境に大きな影響を与えてきたことを理解する必要があります。

そして，川の水の源となる里山や谷津田のこと，林や水辺などにいる生き物たちのことなど，今ある自然を知り大切にするという考えを持つことがとても大事です。

自然を人間の都合でむやみに造り変えないで，自然を使わせてもらうという考え方に変えること，そして，いま生きている生き物を大切にすることによって，昔すんでいた生き物たちが，また，沼にもどってくることにつながると，先生は信じて行動していきます。

大切にしたい，いま，身近にくらす生き物たち

ニホンアカガエル

アカハライモリ

印旛沼の水辺写真

オオカワトンボ

サワガニ